

編集後記

川崎医療福祉大学が開学して約一週間後のある日、私は、食堂で当時医療福祉学科副学科長の末光茂先生と一緒に食事をした時に、「学会誌の発行が必要と思うがどのようにお考えですか？」と尋ねました。この質問に対して末光先生は「大学に役に立つことなら何でも歓迎します。」と言われました。そこで、江草安彦学長に発刊の許可をいただき、具体的な方法を南葉幸雄学長補佐のご助言を得ながらその準備を進めることに致しました。

まず、紀要にするか？学会誌にするか？が問題となりました。これに対し江草学長のご意見から学会誌にすることになりました。そこで先ず学会を創ることが必要となり、学会の規約の草稿と学会誌規約の草稿を同時に作って提出することになりました。今になって考えると、学会誌にしたことでより客観的、普遍的な性格となり、その存在が一般に認められ易くなっておりますので、当時の学長の決断に感謝しております。

川崎医療福祉学会誌は、以上の経過で開学の1991年に第1巻が発行されました。表紙は school color の orange で少し明るい色を選び、横方向に川を blue で入れました。orange 色が褪せやすいことが分かったので、1996年から、染色紙を用いることに致しました。そこで色は当初よりやや変わりました。

学会誌は、先ず国会図書館に登録し、規定により表紙に黒字で International Standard Series Number; ISSN 0917-4605を入れました。次いで、医学中央雑誌の登録雑誌と致しました。以後、和文誌の事務的な仕事は、田口豊郁先生にお願いして今日に至っております。

英文誌は、1995年に発行が計画されました。当時、雑誌の citation index が問題となったことを契機に江草学長の許可をいただいて、international に評価され得る雑誌を発行することとなりました。英文による投稿を基本としており、時に独文の投稿がありますが、殆どは英文です。従って、欧文誌でなく、英文誌の名を用いております。その点から、英文専攻の教員の方のご援助をそれまで以上にうる必要が生じ、橘智子先生に副委員長として就任をお願いし、実務を清水研明先生、橋本信子先生にお願いしました。発行を年1回にすると、投稿者が急ぐときの英文投稿論文を和文誌で取り扱わなければならぬことになり、英文誌の独立性が侵されるので、投稿数にやや問題はありますが年2回と致しました。blue の表紙に Kawasaki Journal of Medical Welfare の文字を school color の orange で入れ、川を丸い形で入れました。投稿規定は、和文誌とは別に詳しいものを小冊子で作りました。次いで、和文誌と同様に国会図書館に登録し、表紙に白字で ISSN 1341-5077を入れました。医学中央雑誌の登録雑誌となりましたが、international な性格から、Chemical Abstracts に申請して関係論文が掲載されることが許可になり、表紙に黒字で CODEN: KJMWFY を入れることに致しました。更に本年(1998)は、US National Library of Medicine に採用が定められました。

本年川崎学園のインターネットのホームページに既刊の和文誌、英文誌の題名、著者、要約の掲載が決まったことは、既に問い合わせの来ていることよりその反響があったことから有意義なことと考えられます。この作業に従事された山本裕陸先生を始め医療情報学科のかたの努力に感謝致します。

また、学会誌編集の効率化は、グローバルスタンダードの一つであり、安藤正人副委員

長を中心に医療情報学科のかたと共に、電算化を試みました。英文誌は既に実行に移され、経費も従来より安く算定出来ました。和文誌も続いて電算化が実行される予定です。

現在、川崎医療福祉大学は、開学時の6学科から、2学科が増設され、更に学科の増設も予定されております。またこれに加えて、修士課程、博士課程の新設に伴ない、関係する教員、学生の増加により投稿は増加し、わが国に於ける医療福祉のパイオニア学会誌として今後その必要性はより増すであろうと思われます。

以上は、他大学と比較すれば歴史の浅い、本学の和文誌、英文誌の成立の過程を、多くの関係した方々の協力を得た、楽しい creative な業務の思い出と共に書かせていただきました。

次に私の委員長として関係した立場から、内容と委員会について述べさせていただきます。

医療福祉の領域では、福祉というどちらかといえば人文社会に属する領域と、医療という自然科学に属する領域、又は両者に渉る境界領域からの論文内容があります。このことは、本学会誌の特長ですが、一方において、編集の際、緒言、方法、結果、考察のスタイル等についての編集の困難さも存在致します。

委員会の運営につきましては、投稿者に対する親切さと共に学問的な正確さを保つことの矛盾した問題が根本にあり、委員会で行なわれた多くの議論は、この2点に集中したと考えております。これらの難しい問題は、今後の編集委員会に常に存在すると思われます。

私は、常に本学会誌に投稿し、常に投稿者の立場から考えて参りました。委員会が投稿者に愛情をもつ限り本誌に対する投稿は続くであろうし、本誌の権威が増し、多くの文献請求がくるようになれば、更に投稿の価値が増すであろうと考えます。

委員会の内規を充実致しましたのは、将来の trouble を少なくしたいとの考えからですが、未だ完全ではありません。

今後の技術的問題として、学会誌の紙面のサイズは、現在の趨勢から考えるとA4版にすべきと考えております。活字をやや大きくし、1ページの活字数を少し増せば、全体の費用はあまり増えないと思われます。

変動する社会に対応して、雑誌も常に改革を要求され又それを先取りする必要もあると思われますが、少なくとも、和文誌、英文誌を年2回定期に発行することは、私の切なる願いです。定期発行で無ければ外国の二次刊行誌での掲載資格は無くなります。

現在迄お世話になった、江草学長、南葉学長補佐、橘、安藤両副委員長、歴代の委員の皆様、編集の事務を担当された、田口、清水先生及び教員秘書室の室長始め関係の方々、LL教室の方々に厚くお礼申し上げます。同時に、今まで本誌を支えてきた投稿者、読者の方々に感謝の意を表します。

私は、川崎医療福祉大学を本年度を以て定年退職致します。同時に現在まで約8年間、ご協力を得て務め得た学会誌編集委員会の委員長を辞任致します。この期に本学会誌発刊よりの経過を述べ、又編集に係わってきた私の考えを述べさせていただきます。

最後に皆様のご健康とご活躍を祈り、筆を擱おきます。

緒 方 正 名